文藝時評

川村二郎

河出書房新社

川村二郎（かわむらじろう）
一九二八年、愛知県生れ。東京大学独文科卒業。第一評論集『限界の文学』（六九年刊）で亀井勝一郎賞を受賞。以後、古代から現代文学まで幅広い評論活動を展開している。著者はほかに、『幻視と変奏』『語り物の宇宙』『内田百閒論』『日本廻国記　一宮巡歴』など。都立大学教授。

文藝時評

一九八八年一一月一日　初版印刷
一九八八年一一月八日　初版発行

著者　川村二郎
発行者　清水勝
発行所　河出書房新社
151 東京都渋谷区千駄谷二―三二―二
電話〇三―四〇四―一二〇一営業
〇三―四〇四―八六一一編集
振替　東京〇―一〇八〇二

印刷　大日本印刷
製本　大口製本

落丁・乱丁本はおとりかえします
定価は帯・カバーに表示してあります
ISBN4-309-00531-4

◎一九八八

目次

昭和五十三年……7
昭和五十四年……87
昭和五十五年……161
昭和五十六年……233
昭和五十七年……303
昭和五十八年……373
昭和五十九年……443
昭和六十年……513

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

昭和六十一年……581
昭和六十二年……611
あとがき……640
索引……642

装丁　平出　隆
カット＝「還魂紙料」

文藝時評

昭和五十三年

○日中平和条約調印
○ベトナム軍、カンボジアへ侵攻

○「人民寺院」事件
○江藤淳、本多秋五「無条件降伏」論争
○ベストセラー「不確実性の時代」、インベーダーゲーム流行

○本居宣長（小林秀雄）○密会（安部公房）○ギヤマンビードロ（林京子）○水の都（庄野潤三）○夕暮まで（吉行淳之介）○伸予（高橋揆一郎）○海を感じる時（中沢けい）○麦熟るる日に（中野孝次）

昭和五十三年一月

江藤淳との対談（「新潮」）で、小林秀雄が、『本居宣長』を書きはじめてから完成に到るまで、十一年半の歳月をついやしたといっている。十一年半か、と思わず呟いてしまう。この作品が「新潮」に連載されだした、はじめの頃ははっきり記憶にない。そして連載中、時たまのぞきはしたものの、思考の文脈がたしかにたどれぬままに一部分を読んで見ても、曖昧な印象しか残らないのは是非もなかった。連載の中休みも少くなかったように思う。しかしその作品は今ようやく、堂々たる菊判六百ページの威容をそなえて完全な姿を現わした。この大冊を読み終えた現在、精神の異様なたかぶりと疲労を、さながら肉体の感覚のようになまなましくおぼえるのを禁じ得ない。

肉体の感覚のように、ではなく、まさしく肉体の感覚として、というべきか。ここで引かれている荻生徂徠の言葉に、「凡ソ身ト言フ者ハ皆己レヲ謂フ也。己レナレバ豈心ヲ外ニセンヤ」（四〇七ページ）とある。その、おのれの身の感覚。少年時代、数キロの遠泳を終えて陸に上った時の、疲れはてた昂揚を思いだす。

もちろん、水練の名手ならとにかく、未熟な泳ぎ手には、無心に水に身をゆだね、軽々と波を切るような泳ぎ方はできるものではない。水は持続的な重い抵抗であり、抵抗をからだ全体で押しのけるのでなくては、一かきも先へ進まない。しかも迂闊にかき分ければ溺れる。少くとも無用に体力を消耗して、遠泳は断念せざるを得なくなる。『本居宣長』は、そのような重い水である。

しかしそう考えると、自分が果して泳ぎ切ったのかどうか、たかぶりの中で、妙に心もとない気分になってくる。つまりそれほどに、抵抗感は強かったのである。泳いだのか溺れたのか、さし当りそれはどうでもよい。その抵抗感の強さについて、今は語りたいと思う。

難解、晦渋ということではない。むしろ、普通に読んで、すこぶる読みやすいのである。六百ページを一息に通り抜けるわけにはむろん行かないにしても、読み進み、めくり終えたページの厚みが増すにつれて、読書にはいわば加速度がつく。それは評論を読むというより、ほとんど物語を読むのに近い経験である。今さらいうにも当らぬことだが、歯切れのよい文章のきびきびした明確なリズムが、それに相応するリズムを読者の内部に呼び起し、この律動が、前進に快いはずみを与えるからだろう。巧みな旋律の効果がそれに附け加わる。第一章は宣長の遺言書と墓の話ではじまる。墓に桜の木を植えよと宣長が遺言書に記したことが紹介され、彼の桜に対する愛着には何か異常なものがあったと語られる。遺言書をしたためた後、彼は桜の歌ばかり

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

を集めた歌集を編む。そこで、桜への彼の執着をまざまざと示しているとして、その歌集の長い後記が引用される。「(歌の中には)いたくそゞろき、たはぶれたるやうなること、はたをり〳〵まじれるを、をしへ子ども、めづらし、おかし、けうありと思ひて、ゆめかゝるさまを、まねばむとな思ひかけそ、あなものぐるほし」といった言葉が後記のうちにある。これを受ける、第一章の末尾の段はこうである。

「あなものぐるほし」といふ言葉は、たゞ「をしへ子ども」に掛かる言葉とも思へない。彼にしてみても、物ぐるほしいのは、また我が心でもあつたであらうか。彼には、塚の上の山櫻が見えていたやうである。

(一五ページ)

聞きなれたといえば聞きなれた、しかしいつもながら耳に甘い旋律である。頻出すればまたかという感じになるだろうが、宣長ばかりでなく、藤樹、仁斎、徂徠、また契沖、真淵、秋成と、江戸期の学芸の巨人たちの著作をめぐりながら、時には考証風に細部を吟味するという論の性質上、そうたびたび、これが鳴るということもない。それだけに、要所に置かれるとよくひびく。旋律のヴィルトゥオーゾの芸も枯れてきた、と思わざるを得ない。

晦渋でないのは、こうした文章のリズム、旋律が有効に働いているせいがあるとして、しかし理由はそれだけではない。むしろこの方が本質的な理由だが、それは、この書物が、根本において、いつも同じことしか語っていないからである。

同じこととは何か。「さかしら」を去れ。見えたままに物を見よ。六百ページを通じて語られていることは、煎じつめれば、この要請につきるといってよい。

きわめて単純明快な要請であって、曖昧な含みを容れる余地はないと見える。単純明快、あるいは剛毅木訥ともいえるだろうが、とかくに複雑に向い巧言令色に傾くわれわれの時代には、この単純、木訥は、類を見がたいとさえ思われる。

そこでまず、抵抗を感じなくてはならない。それほど単純な要請を提供するために、なぜ六百ページも書く必要があるのか。一言ですむはずの所で、どうして千万言をついやさなくてはならないのか。ただ一片の真実をいいたいために、千万の綺語をついやすといったのは太宰治だが、そのような、良心的とも見え狡猾とも見えあわれにも見える心の態度と、ここに働いている心は何がしかの所縁を持っているのか。

その所縁は多分ない。小林氏はおおよそイロニーとは縁がない。千万言をついやすのは、単純なことの単純さが、今日には類を絶しているだけ、それだけわれわれにとって理解しがたいと考えているからだと思う。つまり啓蒙家の

熱意のあらわれ。それは宣長が、漢意（カラゴコロ）を排しあるがままの本然を尊びながら、その本然に安らかに身をゆだねる代りに、折あるごとに、偏執的というほかないほど漢意を攻撃してやまなかったのと、血脈を通じているだろう。

たしかに、単純なことを理解するのはおよそ単純なことではない。「さかしら」、合理主義的な分析と証明の精神は、近代人であるわれわれの心の肌に、生れついての痣かなんぞのようにしみついている。単純なものを見れば、これには何か隠れた複雑なからくりがあるのではないのか、とか、ためにする擬装ではないか、とか、すぐさま疑いたくなる。この心の傾向に対して、分析ではなく「知ると感ずるとが同じであるやうな、全的な認識」（一四四ページ）を要求し、「分裂を知らない直觀」（一五六ページ）の意義を強調することは、明らかに啓発的な行為である。ただし、いわゆる社会科学、人文科学といった領分はさておき、少くとも文学批評の場では、ほかならぬ小林氏たちのこれまでの営為によって、「全的な認識」「直觀」の重要性は、かなり認められるようになってきていると思われる。その点、啓蒙家は多少心を安んじてもいいのではないか、という気がする。

しかしそれにしても、単純を理解することと単純を体得すること、いいかえればみずから単純であることとは、全く別のことである。そしておそらくここに、あるがままの本然、自然を求める心の志向にとっての、最大の難問がある。本来単純で自然な存在ならば、ことさら自然を求めようと思わないのはもちろん、何が自然で何が不自然であるかといった弁別に、心をわずらわすいわれもない。一方自然を求める心は、求めるという意識の働きそれ自体において、すでに不自然だということになりかねない。「さかしら」でない人間は必ずしも「さかしら」を忌避しないし、「さかしら」を拒否する人間は、拒否という心のこわばりによって、われ知らず「さかしら」にのめりこむ。

この逆説を解明するためについやされている言葉が、この書物の中で、ぼくにとっては最も喚起的で、抵抗感も強いと感じられた。作者もとりわけ力をこめた部分ではあるまいかと臆測する。具体的には、宣長と真淵の対比を述べた部分である。

真淵と宣長の師弟関係はかなり危険な緊張をはらんでいて、宣長は真淵から破門状を送りつけられ、謝罪文を書いたりしてもいる。その時の宣長の「心事は、大變複雑なものだつたに違ひない」（二三七ページ）と小林氏はいいながら、しかも、「忖度は無用」である、「彼が直ちにとつた決斷を記すれば足りる」、「宣長は、複雑な自己の心理などにかゝづらふ興味を、全く持つてゐなかつたと思ふ」とつけ足す。ここは、先ほどいった小林氏一流の旋律ときこえる。しかしその後、謝罪文が引用され、「（この文を）率直に受容れゝば、眞淵にはもう餘計な事を思ふ必要はなかつたであらう。意見の相違よりもつと深いところで、學問の道が、二人を結んでゐた」（二三九ページ）と語られるのを見ると、

小林氏が、心理忖度（つまりさかしら）の愚をにべもなく斥けるというにとどまらず、心理の奥にあるものをたしかに見据えていることが納得できるようである。

その納得の深さに応じて、ずっと後の章で、真淵の陥った罠について語る声も、深く真率なひびきを帯びてきこえてくるだろう。

眞淵が熱心に論じたのは、神の道「其物」ではなかつた。神の道の「さま」であつた。わが國の神道には教へがない。教へといふものの全くないところが尊いのである。眞淵ほど、これをはつきりと理會した人はゐなかつた。宣長が、古學を開いた眞淵の「いさを」を言ふ時に考へてゐたのは、その事だつたと言つてよからう。だが、晩年の眞淵は、この、わが國の神道に現れた、彼の言葉で言へば、「國の手ぶり」を、「たゞに指す」言葉を烈しく求めたのである。さかしらを厭ふあまり、自然の道を、しひて立てんとし、人作りの小道を惡むあまり、自然の大道を說かんと急ぎ、宣長の言つたやうに、「おのづから、猶その意（漢意）におつる」事になつた。

（五二四―五ページ）

ここからは、小林氏が近代の知識や学問を裁く際にしばしば耳につく、高飛車な裁断口調はきこえない。真淵と宣長を結ぶ学問の重い意義を感ずれば感ずるだけ、真淵のおかした踏み迷いが、わが身のことのように痛切に惜しまれる。この激した口調は、その痛切な思いをそのままに映しだしていると思われる。

この引用文の骨子は、その少し前（五一四ページ）に引かれている宣長の文章にもとづいているといってよい。老荘の道は一見神の道に似ている。さかしらを厭い、自然を尊ぶからだ。しかし彼らの道はさかしらを厭うて自然の道を強いて立てようとするのだから、その自然は真の自然ではない。

「もし自然に任すをよしとせば、さかしらなる世は、そのさかしらのまゝにてあらんこそ、眞の自然には有べきに、そのさかしらを厭ひ惡むは、返りて自然に背ける强事也」

老荘を名ざしているが、間接的に真淵への批判と見なされる文章。意識と無意識に関する弁証法の困難が、ここで容赦なく摘発されている。

しかしそれでは、宣長はこの困難をどのように越えようとするのか。老荘の道と似て非なる神の道につきさえすれば、たちどころに困難は解消するかのようである。だが、その神の道とはいかなるものか。今の引用にすぐつづけて彼はいう。

「さて神の道は、さかしらを厭ひて、自然を立んとする道にはあらず、もとより神の道のまゝなる道也、これいかでかかの老荘と同じからん」

老荘の道についての論理的な追究を読んで、その鋭さに

感心しながらここへくると、普通の読者ならまず唖然とするのではなかろうか。ある局面では、きわめて犀利な判断を下す力のある頭脳が、別の局面に入ると、一変して判断停止の状態に陥り、神の道は神の道だなどと、無意味な同語反復に居直ってしまう。それで困難が解決されるなら気楽なものだと、誰しも思うのが自然ではあるまいか。この同語反復は、狂信とまではいわずとも、明らかに信仰の領分でのみ諒解されることである。したがって、熱烈な信仰家が憑かれたように口走るのなら、それはそれでもっともだと思うこともできよう。一方で醒めた論理を操り得る人の言葉と思えばこそ、面妖の印象は覆いがたいのである。

どうして一人の人間が、理知の人でありながら同時に信の人であり得るのか。小林氏はこんな疑問に直接答えているわけではないが、宣長の信が、自然とか根源とかいった抽象的な観念から発したものでなく、具体的な「物」の経験から生じていることをいうことによって、説得力のある答えを出してくれていると思う。「物」、すなわち今の場合なら、神の道の姿をありのままに記した書物、『古事記』である。宣長は「物のたしかな感知といふ事で、自分に一番痛切な經驗をさせたのは、『古事記』といふ書物であつた、と端的に語つてゐるのだ」、「言葉で作られた『物』の感知が、自分にはどんな豊かな經驗であつたか、これを明らめようとすると、學問の道は、もうその外には無い、といふ一と筋、おのづから繋がつて了つた」(四一九ページ)。これらの言葉はきわめて啓発的である。観念に憑かれていれば物は見えない。したがってその信は、盲目の狂信に逸脱する危険を持つ。物の経験とは、物をたしかに見ることだから、そこから信が生じても、眼はいつも開かれている。明視に直結した信は、理知を排するのではなくむしろ理知を包みこんでいるのであり、たとえ場合によって一見不可解な形を取ろうと、狂信の道に迷いこむことは決してない。

――啓発的な言葉に導かれて、自己流に先ほどの疑問の答を考えれば、大体こんなことになる。

こう考えることができるのは、ぼくなりに、宣長の『古事記』経験が信じられるからである。もともと、宣長の言葉にはなじめなかった。漢意を攻撃し論敵を糾弾する言葉の調子など、いかにも居丈高にきこえて疎ましかった。だが、十数年前になるが、はじめて『古事記伝』を読んだ時、なるほどこれは本当に偉い人なのだと肝に銘じた。こまかくしらべるという仕事が、そのまま批評になるのだということを、巨大な実例でもって眼の前に見せつけられたような気がした。偉い人の仕事では、考証も研究も批評も一つになるのだな、と、その時会得した。ただ、なぜそうなるのかといったことを、じっくり考えて見ようとはしなかった。それだけに、小林氏が「物」の経験をいい、宣長は「古言」に証せられる喜びを味った(三六一ページ)といい、『古事記』の訓詁という長い道を徹底的にたどった末に、彼の心眼に、上代の事物のありのままの具体性が映じてきた(五

三三ページ）というのを聞いていると、薄皮をはがすように、曖昧だったことの真相が明らかにされてくるのを感ずる。

そこで、最後の抵抗感について述べなくてはならない。十一年半の歳月をついやして書かれたこの大著が、単純な事柄の途方もない重さを徹底して考え、考えた結果を委曲をつくして語ることによって、強い説得力を持っていることは疑いない。しかしそれでは、この書物は、説得、乃至啓蒙の役割を果しさえすれば、安んじて自足するのだろうか。いいかえれば、小林氏は宣長の紹介役に自若としてとどまっているのか。批評者と批評の対象との関係において、ここには最終的に、何か分りにくいものがある。

批評は結局、啓蒙的解説であればよい。ただし、すべて種のうち完全なものは種を超越するというゲーテの言葉通り、最高度の解説になれば、もはや解説の域にはとどまらず、おのずから独立した価値となる。それが批評の本来のありようだろうと、ぼくなどは考えている。それにしても、最高度の解説が書かれるためには、解き明さるべき対象が、なまじいな解説家の手には到底負えぬほど重い実質を持っていなくてはならないだろう。極言すれば、聖典に限られよう。宣長にとって『古事記』は明らかに聖典であり、聖典の意味を誰よりも正確に知ったからこそ、彼はこれに最もふさわしい解説の方法を適用した。すなわち、訓詁という、一見受身で控え目だが、受身であるからこそかえって、派手な気のきいた饒舌などには思いも及ばぬ対象の重い力を、充分に感受し得る方法を。『古事記伝』は、まさしくその方法の勝利にほかならないだろう。

しかし、では、『古事記』に『古事記伝』が相対しているように、この『本居宣長』は宣長の仕事に相対しているだろうか。

小林氏は訓詁ということをくり返し強調している。「私の仕事の根本は、何度くり返して言ってもいゝが、宣長の遺した原文の訓詁にあるので、彼の考への新解釋など企てゝゐるのではないからだ。」（二五八ページ）また、江藤氏との対談でも、「私のは、宣長の文章の訓詁の仕事なんですよ」といって、今の学問が訓詁から遠ざかり新解釈を求めるのに急になっていると批判している。いわれていることは明らかである。ぼくが疑問とするのは、宣長の文章が本当に訓詁の対象たり得るのだろうか、一般化していえば、批評の文章が聖典たり得るのだろうか、ということだ。

聖典という言葉を使っているのは、あるヨーロッパの批評家について、彼はいつでもテキストを、聖書注釈家の眼で読む、といわれていたのが忘れがたいからである。聖書注釈は当然向うの世界での第一等の訓詁だろう。それはともかく、どんな原文でも、訓詁の対象たり得ると、いえばいえるかもしれない。批評でも、独立した価値となれば作品であり、したがって感知に値する「物」だということになるかもしれない。しかし『古事記』と比べるまでもなく、

それが「物」として、相対的に不安定だということは否定できまい。

「物」の経験から出発した訓詁が、「物」の力に支えられ、保証されて、それ自体「物」となる。そして真の「物」なら必ず持っているはずの、不透明な、「岩に刻まれた意味不明の碑文」（一〇五ページ）のような性格を分ち与えられる。宣長にそうした不透明性があることは確かだとして、しかし分ち与えられた側が、与えた側以上に不透明になるはずはないのである。

小林氏が自分の仕事を訓詁という時、それを通じて批評が「物」となることを求めているのではないかと、ぼくは推測する。心理への無用なかかずらい、といわれればそれまでである。だが、いずれにせよ、ここで宣長の、凡俗の眼から見れば奇怪ですらあるような分りにくさ、つまり不透明性が、見事に透明化されていることは明らかである。言いがかりのつもりは全くないが、これほど見事に透明化されるということは、対象の不透明度がそもそもさして強くないからではないか、そんな疑念をぼくは抑えがたい。あえてさらにいえば、「物」を経験する必要を、心をこめて説きながら、この著者は、実はそれほど「物」に執着していないのではないか、むしろそれを感知する必要を説くことの方を好んでいるのではないか、とも思わなくてはならない。

先に真淵に対する小林氏の批判を引用し、その踏み迷いをわが身のことのように惜しんでいると書いた。批判の口調がぼくにそうきこえただけで、あるいは空耳かもしれない。しかし、否応なしに「さかしら」と交渉を持たざるを得ない当代の代表的な批評家が、真淵の悲劇に、「物」の自然に即することを欲しながら容易に即しがたい、みずからの営為の行程をなぞらえていはすまいかと、そこでふっと思ったのである。

昭和五十三年二月

昨年十一月二日に、ドイツの小説家ハンス・エーリヒ・ノサックが世を去った。享年七十六。ぼくの眼にした限り、日本の新聞でその訃を報じたものは一紙もなかった。すでに十冊近くその作品の邦訳が出ている作者の死に対して、冷淡にすぎるのではないかとなじりたいような気持がする。これがかりにハインリヒ・ベルだったとしたら、小説家としての器量や才幹は問題外として、とにかくノーベル文学賞受賞者ということでかなり大きく報道されたにちがいない。

しかし、そんな、考えようによってはそれこそ失礼な空想に心をゆだね、新聞ジャーナリズムの体質、などという余計なことまで思いめぐらしていると、ノサックにはかえ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo